名寄市立大学の窓から～知への誘い～

vol.55

「音楽を事例とした社会保育学の試み」

保健福祉学部　社会保育学科　教授　三国（みくに）　和子（かずこ）

社会保育学科は、研究という側面では「社会保育学」という新しい学問領域の開拓を目指す学科です。私たちは、この社会保育学を、これまでの保育学とはまったく別なものではなく、保育学に社会的な視点を強化する保育学の一潮流と考えています。

「社会的な視点を強化する」ことは、子どもを社会に適応させていく存在とみるのではなく、やがて社会を変革できる主体と考え、保育内容を社会との関わりから捉えることにもつながります。

ここでは保育内容としての音楽について、社会との関わりから考えてみます。

最近、ゴリラ研究でよく知られる人類学者で京都大学総長の山極寿一（やまぎわじゅいち）氏などによる、「ヒトの初期における音声コミュニケーションは音楽的であり、ここから言語や音楽が生まれた」とする主張が目立つようになりました。また、音楽は一緒に演奏する人や一緒に聴く人の間に一体感を生み、共感能力を高める機能があることも多く指摘されています。

これらのことから、音楽はそもそもコミュニケーションの機能を持ち、その意味において音楽活動は社会的な活動であると言えます。また、音楽によるコミュニケーションの特徴は、言語によるコミュニケーションのような呼びかけと応答といった間（ま）を置いたやり取りではなく、音楽を共有することによって生まれる一体感や共感だとも言えます。

しかし現実には、さまざまな場所でイヤホンをつけて音楽を楽しむ人の姿をよく見かけます。そうした場面から、音楽を聴くことは、一見個人的な活動と感じられます。このことと音楽活動が社会的活動であることとはどう結びつくのでしょうか。

音楽は、リズム、メロディー、ハーモニー、調性、形式、音色などの構成要素によって、ある集団の中で様式（決め事や約束事）が形成され、つくられています。ですから1人で聴いている音楽も実は集団での決め事の上に成り立っているわけで、その意味で音楽を聴く行為自体が社会的な活動なのです。

さて、子どもに目を転じてみましょう。子どもが集団で遊ぶ際、よく「○○ってことね」と決め事をします。同じことは音楽においても行われ、たとえば「ピッピッピーの音で始まるってことね」などごくシンプルで素朴なものから始まります。それは様式の形成の萌芽と捉えられます。考えてみると、昔からわらべ歌や替え歌など、子どもたちは自分たちで決め事をして音楽をつくってきました。

子どもたちはそれらの楽しさやおかしさなどを共有することによって一体感を持ち、共感性を高めてきたのです。そしてすごいことに、そういうことができるほど音楽の構成要素を理解していたわけです。

音楽に関する保育内容を社会との関わりから捉えると、個と音との関係（個人的な音への興味・関心）だけではなく、集団間での音との関わりに着目すると同時に、様式や様式を形成する音楽構成要素の理解に着目する必要があります。ごく簡単に言うと、保育の中で音楽活動をする際に大切なのは、個人的に「楽しい」という活動だけではなく集団で「楽しいね」という活動をすることにより、音楽への理解を深めていくということです。

大学図書館へようこそ！

7月15日、16日は名大祭の一般公開が行われます。図書館では今年も次のイベントを企画しました。

≪ビブリオバトルin名大祭≫

学内予選会を勝ち抜いた学生がお気に入りの本を5分間で紹介。読みたくなった本に投票して「チャンプ本」を決定する書評ゲームです。

ぜひ、観戦して投票に参加してください。

◆と　き　7月15日（土）　10:00～11:00
◆ところ　市立大学図書館1階
　　プレゼンテーションスペース

≪サイエンスカフェin名大祭≫

看護学科の加藤千恵子（かとうちえこ）准教授による「タッチの効果を指尖脈波（しせんみゃくは）で見える化する」と題した講演と、意見交換などを行います。

◆と　き　7月15日（土）　14:00～15:30
◆ところ　市立大学図書館1階
　　オープングループ
　　ワークスペース

※参加無料。フリードリンク付き。
※申込不要。気軽にお立ち寄りください。

◆問い合わせ
名寄市立大学図書館　☎01654②4199（内線4201）